

所蔵資料紹介

みむらさんせいりょういんごくらくじ 三村山清冷院極楽寺跡出土瓦

つくば市小田，筑波山系のひとつ宝鏡山（小田山）の麓に，かつて巨大な寺院が存在しました。三村山極楽寺と呼ばれます。

現在は山林，あるいは田畑となり，伽藍はまったく失われています。しかし，その旧寺域や小田集落にはさまざまな遺物がみられます。まず、宝鏡山頂には，高さ 2.5 メートルを計る宝篋印塔があります。鎌倉時代後期の作と推定され，茨城県内では最古の宝篋印塔となります。また，旧寺域には鎌倉時代末期の巨大な五輪塔があり，高さは 3 メートルを超えます（この 2 基の石造物は，当館常設展「茨城の歴史をさぐる」でもレプリカとして御覧になることができます）。このほか，石造地蔵菩薩像（正応 2 年銘 = 1289），小田集落の寺院・神社に移された石燈籠，不殺生界石なども残され，在りし日の極楽寺の繁栄を垣間見ることができます。

この三村山極楽寺と密接な関係にあるのが，忍性（にんしょう）という僧侶です。忍性は大和国（奈良県）の出身で，西大寺の叡尊（えいそん）の弟子として，律宗の布教に取り組みました。律宗とは仏の教えであり，併せて僧侶として守らなくてはならないさまざまな仏の戒めを説いたものです。鎌倉時代になりますと，いわゆる新仏教という国家・政治体制より個人の救済を目的とした教えが広まりました。そのため，仏教による社会秩序の維持が危うくなってきたのです。叡尊はそれを嘆き，鎌倉幕府も体制維持を図るためにも大いに律宗に期待したのでした。

こうした思想的，あるいは社会的背景のもと，建長 4 年（1252），忍性は常陸国に布教のためにやってきました。そして三村山極楽寺の子院である清冷院に入りました。そしてここを東国における律宗布教の拠点としたのです。以後，弘長元年（1261）に拠点を鎌倉に移すまで，忍性は常陸国を中心に律宗を広めていくわけです。

忍性は布教とともに，土木工事，あるいは社会事業にも積極的に関わりました。そのため，忍性にはさまざまな技術を持つ職人集団を組織していたようです。前述した石造物は，大和国から招いた石工によって作られたものとみられます。

こうした石造物とともに注目されるのが，伽藍を荘厳したさまざまな瓦です。これも忍性に関わりの深い瓦職人によって製作された可能性が高いのです。

これらの極楽寺の瓦に関しては，すでに江戸時代後期，小田村出身の農政学者・長島

尉信（ながしまやすのぶ）が興味を示し、自著『小田事跡』のなかで、瓦の拓本などを紹介しながら、往時の極楽寺、そして外護者であった小田氏への考察を述べています。つまり、極楽寺の瓦は江戸時代から注目されていたのでした。



軒平瓦 画質を落としています。

そこで、当館所蔵の瓦のうち、主な3点を紹介いたします。

まず、軒平瓦です。縦9 cm、横16 cm（以上残存部）、瓦当^{がとうめん}面厚さ6 cmを計ります。下向き剣頭文と呼ばれる、ちょうど剣を逆さまにしたような陽刻の文様が並び、そこに「清」という字が陽刻されています。この瓦自体、全

体の一部ですので、当然「冷」「院」という文字もあったはずですが、様式的には西暦1200年代前半から半ばころの作です。忍性が清冷院に入るときか、その直前に建てられた（あるいは葺き替えられた）堂宇に使われていたと思われる。



平瓦1 画質を落としています。



平瓦2 画質を落としています。

次に，平瓦 1 です。縦 37 cm，横 18 cm（残存部），厚さ 2.3 cm を計ります。「三村山」「清冷院」の文字が残存したなかで 3 行にわたって陽刻され、間を同じく陽刻による交差線と枠線で区画しています。こうした文様付けは瓦を作る工程のうち，焼成前、表面を叩いて粘土を締める過程でなされます。叩く板には「三村山」「清冷院」と印刻されていたわけですが，これは印鑑と同じく反対に文字が彫られていたのです。

これと同じタイプの平瓦は他所でも比較的多く見つかっていますが，縦の長さが確認できるものとしては現在唯一です。西暦 1200 年代後半から，1300 年代にかけて作られたと思われます。

最後に，平瓦 2 を紹介します。縦 30 cm，横 23 cm，厚さ 2 cm を計る，ほぼ完形の平瓦です。

表面中央に凸線による「極楽寺 正和三年甲^三寅^二(四)月十日」の銘があります。正和 3 年は，西暦 1314 年であり，この瓦が作られた絶対年代が判明しているわけです。この瓦の文字は平瓦 1 とは異なり，瓦に曲線を持たせるために，凹型に押しつけて，裏面を叩いたり，なでたりするなかで，凹形に陰刻されている文字が表面に転写されてできたものです。

さて，正和 3 年段階では，すでに忍性は亡くなっていました（没年は乾元 2 年 = 1303）。さらに，忍性自体が三村山極楽寺を離れてからでも 50 年以上が過ぎています。それでも，嘗々と伽藍が営まれ，そこで瓦も作られていたわけですから，清冷院だけでなく，三村山全体が律宗化していた可能性も考えられます。

最初に述べましたとおり，三村山極楽寺の伽藍は今日では全く失われています。しかし，忍性や，その傘下の職人集団によって，鎌倉時代の筑波山の麓に，当時の最先端の技術が導入されたのです。その影響がその後の歴史にどのように影響したかについては，今後研究を深めていかななくてはなりません。しかし，少なくとも忍性を迎え，そしてその技術を受け入れることのできた，鎌倉時代の茨城の先進性だけは確かなものといえるでしょう。

（首席研究員 飛田英世）